

我が道を行く

岩手県一関市立藤沢中学校

三年 佐 藤 野乃花

「信じていれば夢は叶う」そんな言葉は嘘だ。正しくは「信じて人並み以上の努力をし、それ相応の結果を出し、人より優れていれたいの夢は叶う」だ。「信じていれば夢は叶う」なんて、どこかの誰かが私達の頭に残りやすいように短く省略したに過ぎない。

私の将来の夢は、イラストレーターになることだ。それもとびきり大人気の。私は物心つくずっと前から歌ったり踊ったりなにかを表現するのが好きで、その中でも群を抜いて一番好きなのが「絵を描くこと」だった。あまりにも夢中になって描くので、母からはよく「三度のメシよりお絵描き」などと言われたりした。実際そうだったのだと思う。そのため小さい頃から私の中には「将来はきっと絵に関係する仕事に就くんだろうな」と漠然とした何かがあった。その何かは成長するにつれ具体的なものになっていき、小学二年生の時には「漫画家になりたい」五年生の時には「絵師になりたい」そして六年生の時には「イラストレーターになりたい」。そしてその夢は今の所更新される予定はない。

イラストレーターになりたい。私は、誰からも認められるような、大人気のイラストレーターになり

たい。そう思い始めて今年で四年目。ついに義務教育最後の年である。ここで大半の中学生は受験のために時間を費やし、必死になって国語や数学などを勉強するのだろう。私も同じく受験生ではあるのだが、他の仲間達とは方向性が全く違う。私はイラスト系の学校に進むのだ。「専門学校は高校を卒業してからの方が良い」この台詞は、何度も何度も色々な人から言われた。しかし、無難な道を選んだとしてそれについてくる結果は果たして素晴らしいものになるだろうか。私は他の人より早くイラストレーターになりポップカルチャー業界の上へ行きたい。そのためならなんだってしてみせよう。これが私の人生をかけた「挑戦」なのだ。

いつのことだったかあまり確かではないが、兄からこんなことを言われた記憶がある。

「俺の夢はお前に託した。」

兄は昔から、これになりたいというような将来の夢が見つからない様だった。そして現在は成人し、綺麗な恋人もいて、それなりに幸せそうだった。しかし、夢にかける情熱を燃やせなかったことだけが心残りだと、兄は言っていたのだ。

「物心つく前から、つまり十年以上前から絵を描き続けているお前の夢が叶わないんだったら、俺はもう夢なんか信じられない。だから俺のためにも、絶対にイラストレーターになれよ。」

私はお腹の辺りから込み上げてくる熱を感じた。絶対叶えると、そう心の底から誓った。

あと数カ月もしたら私は念願の専門学校へ進む。親元を離れ、慣れない土地での寮生活が始まるのだ。もちろん知っている人は一人も居ないため、友達も一から作ることになる。不安が無いと言えは嘘になるが、でもそれ以上に期待の方が圧倒的に大きいのだ。想像しただけでなんて胸の高鳴ることか！ 生

きている実感というのはきつとこういったものなのだろう。

私には決めていることがある。イラストレーターになって、しっかりと働けるようになったら、親に恩返しをするのだ。自転車が好きで、休日には毎回のよう Сайクリングへ行く父には自転車を買ってあげる。しかも外国製の、数百万円もする本格的なロードバイクを。優しくて大好きな母にはなにか物をプレゼントするということよりは一緒に旅行へ出かけたい。両親に喜んでほしいのだ。今はまだなんにも返せなくても、いつか必ず。

何度も言うようだが、私の夢はイラストレーターになることだ。それもとびきり大人気の。夢を夢で終わらせないために、私は周りの人に夢を公言することになっている。そして自分の逃げ場を無くすのだ。公言し、応援してくれる人が増えればやる気にもつながる。私はイラストレーターになる！ 私はイラストレーターになる！ 生活をきりつめ、学費を出してくれる両親、サポートしてくれる先生、応援してくれる友達……。全てに感謝し、必ず結果を残す。いつか私の絵が載った本で書店が埋めつくされるくらいに。

必ず成長して帰ってくる。私の決意は固い。